

令和8年度 文教常任委員会 行政視察報告書

視 察 日 時	令和8年7月10日（金）10時00分～11時30分		
視 察 先	岐阜県各務原市	人口	約14万3,000人
		面積	87.81km ²
担 当 職 員 等	教育委員会事務局 学校教育課長兼 教育支援センター長 学校教育課 指導主事		
視 察 内 容	不登校対策事業・教育支援センターについて		
視 察 目 的	不登校児童生徒の増加が、全国的な課題であるが、橿原市でも同様である。 特に、本市の教育支援センター「虹の広場」は利用者の増加に受け入れがおいについておらず、週に1～2回、1回50分といった利用しかできない状況にある。そのため、本市では虹の広場の拡充の方針を打ち出しているが、まだ移転先など詳細は決まっていない。 対して、各務原市は本市と人口が3万人程度しか変わらないが、すでに複数の教育支援センターがある。 本市の今後の教育支援センターの拡充や、運用面での充実を図る上で、先進地の取り組みを学ぶため、視察を行った。		
調 査 概 要	【各務原市の教育支援センターの概要】 *さくらなか（図書館4階）（令和元年開設） *さくらまえみや（元保育園舎を改修し、令和4年から開設） 両施設の特徴 ・家から一步踏み出す支援を行う ・好きなことを好きな時に ・一人で過ごすことも、仲間と活動することも ・自治的な活動 ・調理実習、リラクゼーション、野菜栽培など ・利用時間 祝日、長期休業日を除く、月～金曜日 午前9時15分～午後3時 まずは外に出ることを目標にした施設で、児童生徒のペースに合わせているため時間割もなく、一人で活動しても、みんなで活動してもよい 児童生徒の実態に応じて、活動の幅を広げている 元園舎にあるプールに土を入れ、畑を作っての体験活動も行っている *あすなろ教室（今年4月より、旧特別支援学校跡地に移転）（あすなろ教室としては平成2年より開設） 施設の特徴 ・生活リズムを身につけることを目標にする ・児童生徒の自己決定を支援 ・仲間（異年齢集団）との触れ合い ・スポーツ、音楽、創作活動など ・利用時間 祝日、長期休業日を除く月～金 午前10時～午後2時30分		

令和8年度 文教常任委員会 行政視察報告書

	・朝の準備 1日の活動内容をプリントに記入 ・自主学習 自分で学習課題を決めて取り組む。アドバイスを受けることもできる ・ふりかえり 1日の感想を簡単にプリントに記入 参加する曜日や時間帯は、事前面談で相談して決める 基本的に自主活動が多いが、主に午前中に1時間、ゲームや音楽、ものづくりといった活動時間が設定されている 園庭などを活用して、火を使ったホットドック作りや、音楽療法士を招いての音楽の時間など、さまざまな体験活動を行っている 移転前は、各務原市産業文化センターにあった。手狭になったため、旧特別支援学校の活用が模索される中で、就労支援事業所などとの複合施設として、今年度より新しく移転開設された *学びの部屋ココカラ（図書館4階） ・学校以外や静かな場所で勉強 ・自分で計画を立てて学習 ・小学校高学年～中学生対象 ・利用時間 祝日、長期休業日を除く、火～金曜日 午前9時15分～午後3時 児童生徒が決めた学習を支援することで、社会的自立をめざす中学校に入り、勉強に集中しているので、利用先をココカラに変更するケースもある 利用は8割以上が中学生で、勉強が不安で学校にいけない、という不安を抱える子どもや、進路を意識した学び直しなどを行っている 自分が学習したい内容を準備し、黙々と学習している 【これまでの経緯】 あすなろ教室は、平成2年開設で、当時とはとにかく学校復帰が目的だった。 利用前には、保護者、児童生徒に面接を行い、本当に復帰できるのかを確認していた。しかし、その地点に辿りつけない子どもいた。 さくらは令和元年開設で、学校に復帰するのかどうか以前に「まずは外にでてみませんか？」という目的で、事前の面接なしで始めた。これが不登校対策の転換点となった。 現在は、かならずしも学校復帰を目指すのではなく、多様な場を提供することで、社会的自立を目標に掲げている。 令和4年には、元保育園だった「さくらまえみや」を新設した。
--	--

令和8年度 文教常任委員会 行政視察報告書

＊各務原市の不登校対策としては、他に各小中学校に「心の教室」があり、クラスに入りづらい子どもたちの居場所として対応できるようになっている。
希望に応じて、在籍学級との行き来が可能。

【年間利用者数】

令和7年度（おおよその延べ人数）

＊あすなろ 300人

＊さくらなか 700人

＊さくらまえみや 2, 700人

＊ココカラ 340人

（一度通所をやめてもまた来るので、のべでの計算になっている。どの施設も、希望があれば毎日・1日中の利用も可能。）

【人材配置数】

＊あすなろ メインスタッフ2名 大学生8名のボランティアから日替わりで数名

＊さくらなか 1名

＊まえみや メインスタッフ2名 大学生ボランティア8名から日替わりで数名

＊ココカラ 1名（さくらなかの隣にあるため、スタッフ間で連携）

【他機関との連携】

＊利用に繋がらない子どもに対しては、学校が各施設を紹介してつなぐ他、教育支援センター「すてっぷ」で相談事業をおこなっていて、臨床心理士がいるので、まずはそこに学校がつないで、相談のなかで各施設とも繋いでいく。

＊学校との情報提供

月に1回の定期での情報提供あり。それ以外に個別でも連絡が不定期にある。各支援センターのスタッフに元校長・元教頭が入っているので、以前の教員間のつながりがあるため、よく情報共有されている。

＊庁内連携

福祉政策課とも連携し、情報共有している。家庭状況なども含めて気になる場合には、学校教育課を通して福祉へ連携している。

【学生ボランティアについて】

あすなろ教室の隣に教員を輩出している大学があり、以前よりボランティアとしてきてもらっている。主に、講義の少ない4年生。

卒業生が新しい後輩を紹介してくれたり、小中学校の教員だった大学教員が声掛けを行ってくれるなどで、集まってくれている。

ボランティアによって単位が取れるといった仕組みは特にない。

【今後について】

・「さくらなか」は図書館の建物のひと部屋を利用したもので、スペースも広くないためまだ座学中心となっているため、テコ入れしたいと考えている。

令和8年度 文教常任委員会 行政視察報告書

	*あすなろ教室と元園舎を活用した「さくらまえみや」に機能を集約して、学習の場所ココカラをそれぞれの施設内に整備したいと考えている。
所 感	各務原市を視察先に選んだ理由は、この前日に視察した岡崎市（人口約38万人）より、本市の人口規模により近い自治体での先進的な取り組みを視察したかった点にあった。 本市は人口約11万7千人、各務原市は約14万3千人で、3万人程の差はあるものの、教育支援センターは本市の1カ所に対して、各務原市は4カ所存在している。 各施設では給食はないが、お弁当を持参することもでき、お昼をまたいでの利用も可能である。不登校児童・生徒の家庭では、こどもを日中1人にできずに親が仕事を辞めざるを得なくなることもあり、外出が可能な子であれば、日中の居場所が確保される意味は大きい。 また、一步踏み出すきっかけとしての施設、生活リズムを作る目的で少しずつ連続した通所や体験活動を行う施設、学びに集中するための施設など、こどもの状況や目的に合わせた教育支援センターがあることも、大変興味深い。子どもの状況はさまざまで、外出が難しいお子さんもいれば、積極的に通所したいお子さんもいるので、それぞれに受け入れ先が用意されていて、状況やペースに合わせてもらえるところは、こどもの安心につながると思う。 令和4年に元保育園舎に開設された「さくらまえみや」の受け入れ人数は特に多く、居心地の良さもあるのではないかと感じた。また今年度から移転した「あすなろ教室」も施設が広がったため、今後利用が増える可能性があるだろう。 本市の教育支援センターの移転先候補にも元保育園舎があるため、使い勝手に課題などが無いとお聞きしたところ、小さい子ども向けの施設ではあるが特に使用には問題はなく、複数の部屋があるのはいいこだ、とのことだった。ただし、学校施設が空くのであれば、そちらの方がより適していると思うし、改修は行っているとはいえ閉園した園舎自体が老朽化しているため、保全を考えると今後20年先の目処が立たないといったご回答だった。本市でも参考にしたい。 一方で、教育支援センターがあることでの成果について伺ったところ、子どもは減っているが、対応が必要な子どもは増えており、成果を判断するのは難しいとのことだった。 私見ではあるが、と前置きした上で、昔のようにゲームやテレビに終わりがなく、いつまでも楽しむことができることで「自分のペースを崩せない子ども」が増えているのもひとつの要因ではないか、とのことだった。 例えば不登校の原因に、家でゲームしたい・タブレットしたい、という子もおり、そのような子どもの対応には、保護者にアプローチしたり、臨床心理士につないで面談してもらったりしているとのことだった。

令和8年度 文教常任委員会 行政視察報告書

そのようなお子さんであっても、まずは活動を通してリズムをつくっていくということを大切にしていって、いづれにしても保護者とタッグを組むことがとても大切、とのことだった。

市内には他にフリースクールもあり、それでも公共の居場所に合わない、という子どもたちにとっての選択肢になっている。
お話から、現在の不登校児童生徒の増加を根本的に解決することの難しさや、家庭での対応の大切さについても深く考えさせられた。

もちろんそのような要因だけではなく、不登校の原因には、いじめや教員の理解不足による不適切な対応、発達障害や学習障害に起因するものもあり、学校で多様なこどもを受け止められる環境作りも重要なものというまでもない。

まずは不登校児童生徒が生まれないような学校・学級を作ることが大切だ。

その上で、不登校となった児童生徒が受け入れられ、場合によっては学校にも復帰できるし、あるいは自分なりの勉強を続けて進学や社会的な自立を目指せる施設があるのは素晴らしいことで、各務原市の教育環境の幅広さや豊かさを感じた。

本市の教育支援センターは、利用したくても日数や時間に大きな制約があり、各務原市の施設の受け入れ体制とは大きくかけ離れている。
早期に拡充するとともに、状況の異なる子どもを受け止められるような施設運営の工夫が必要であると分かった。

今後の委員会審議に対し、大いに参考となる視察となった。